

## デューク・エリントンと対蹠の和合 —その動機的作曲法に関する一考察— エドワード・グリーン

デューク・エリントンがジャズの分野における最大の作曲家であることは一般に認められているところであり、それに異論を唱えるつもりはない。だがその理由として通常挙げられるのは、彼のビッグ・バンドを用いての独特の音色用法と、巧みで独創的なハーモニーの使い方である。しかし彼の才能を語る時、その音の響きの素晴らしさを語るだけでは十分とは言えない。エリントンの偉大さの秘密を探るには、それと同等に彼の熟達した楽曲構成、それも特に動機を用いての作曲技法に目を向ける必要がある。

1941年に初めて「美的現実主義(エステティック・リアリズム)」という概念を提唱した詩人で哲学者のエリ・ジューゲルが述べた「すべての美は対蹠の和合化であり、その対蹠の和合化こそは、われわれがわれわれ自身のうちに求めるものである」という言葉は、まさにエリントンの音楽にあてはまる。動機的作曲法による彼の名人芸が、単一性と多様性、予期されるものと意外なもの、表現豊かな官能と冷静な構成力、遅さと速さなどといった対蹠的な要素を、いかにしてひとつに和合させているか、それはまさに音楽における美的現実主義と言えよう。さらに言うならば、動機的展開が基本的にヨーロッパ音楽の特質であるとする考え方は誤りである。実は世界各地の音楽芸術において、そのような例は数多く独立して存在するのである。

以上のような見方を実証するために、ここでは彼の作品のうちから「コンチェルト・フォア・クーター」(1940)、「ソフィスティケイテッド・レディー」(1932)、「イト・ドント・ミー・ア・シング」(1932)、「ハーレム・エアシャフト」(1940)の4曲を取り上げて、詳細に分析することとする。